

■巻頭言	フォーラム2018によせて	1
■特集	【フォーラム2018&平成30年度秋期全国研修会】	2~8
	フォーラム2018報告	2
	表彰式	3~4
	講演「被害者の声」	4~5
	パネルディスカッション「関係機関との連携の『これまで』と『これから』」	6
	秋期全国研修会（全体会）	7
	秋期全国研修会（分科会）	8
■お知らせ		8
■編集後記		8

巻頭言 フォーラム2018によせて

公益社団法人全国被害者支援ネットワーク
副理事長 ● 三輪 佳久

- 1 犯罪被害者支援に関わる方々が一堂に会し、日本被害者学会、犯罪被害救援基金及び警察庁の方々が全国被害者支援ネットワークと共に主催となり、交流を深めている「全国犯罪被害者支援フォーラム」は、今年で23回目を迎えて開催することができました。これも、これまでの開催と同様に、被害者支援活動を支え、協力してこられた皆様方の御支援、御協力によるものであり、改めて深く感謝申し上げます。
- 2 本年のフォーラムは、全国被害者支援ネットワークが本年度で創立20周年を迎える記念すべき節目であり、これまでの犯罪被害者支援の歴史を振り返りつつ、さらなる今後の犯罪被害者支援の発展と充実を目指すものとして開催され、秋篠宮同妃両殿下の御臨席を賜り、進められました。
- 3 「被害者の声」として加藤裕司様の語る「明日に生きる」と題された内容は、最愛の長女を元同僚に殺された犯罪被害者御遺族の方のお話で、「父親は悲しみや怒りを胸に秘め、いまは支援する側で活動している。ただ無念の思いは自然とあふれ、会場はすすり泣きに包まれた。」（『遺族の思い 目を背けない』と題された読売新聞2018.10.21より）、最愛の娘が、ある日突然殺人事件の被害者となるという父親としての悲痛、残酷な体験と、将来に向けて「同じようなつらい経験をした犯罪被害者の家族の一人として、今後一人でも多くの不幸のどん底に突き落とされた方々を、精神的にも経済的にも支援していこう。これをもう20年続けていこうと考えました。」という言葉で語られた、会場からの感動と賛同の拍手に包まれた講演内容でした。
講演を聞かれた方の感想でも「母親の立場からの講演は聴いたことがありますが、父親の立場の話ははじめてでした。やはり母親と違う感情と責任が強く感じられました。」「被害者遺族の苦しみ、悲しみ、まるで自分が直体験をしているかのようにありありと想像す

ることができた。講演が終わったあともしばらく席を立てなかった。」「支援センターの一員として被害の早期段階からマスコミ対応や生活支援の支援をしてあげたかったという気持ちにもなりました。」「まだまだ道半ばとの思いでした。私も被害者支援施策にかかわる者として、明日を生きることをサポートしたいと思いました。」等の感謝と共感の感想が多く寄せられました。

- 犯罪被害者支援活動は、被害を受けた直後から途切れることなく被害者に寄り添い適切な支援で支えるということが、被害者支援の原点であることを改めて確認することができたのではないのでしょうか。
- 4 「関係機関との連携の『これまで』と『これから』」をテーマとするパネルディスカッションは刑事政策、被害者学が専門の川本哲郎教授をコーディネーターとして、警察庁、埼玉県庁、弁護士、いばらき被害者支援センターの各担当者が担当している支援活動の報告を行い、活発な活動論や政策論を展開していました。各パネリストがそれぞれの立場から、被害者支援の現場で感じる課題や関係機関との連携の大切さと困難さについて訴えていました。
会場からの感想では、埼玉県で行なわれている先進的な活動に対する賞賛、感嘆の声と共に、地方自治体の被害者支援活動に対する見解、姿勢に疑問を呈する声もあり、地方自治体の被害者支援活動にも温度差があることがうかがわれ、これからの被害者支援活動において、関係機関との連携の課題の一つになるのではないかと感じられました。
- 5 今回のフォーラムには約450名の皆様が集まりました。本フォーラムに参加された皆様が、本フォーラムから犯罪被害者支援の重要性、必要性を再認識され、これからの犯罪被害者支援活動がさらに一層充実されることを衷心より願っております。
参加者の皆様どうもありがとうございました。